

都城で私も考えた

その他（別言語等） のタイトル	I also thought in Miyakonojo.
著者	福盛 貴弘
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	12
ページ	179-189
発行年	2014-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/3316

都城で私も考えた*

福盛 貴弘

I also thought in Miyakonojô.

Takahiro FUKUMORI

要旨：2013年8月28日～30日まで、宮崎県都城市を訪れた。方言調査が目的である。アクセントに関する予備調査であった。その時に記述したこと、考えたことなど雑感を示したエッセイである。都城方言については、都城方言は語末音節で高くなる語声調方言であるが、アクセントの下がり目が併用される語があるということを記している。

キーワード：都城方言 語声調 アクセント 下がり目 トルコ語

1. 都城探訪

自己紹介。私が福盛貴弘である。実験音声学を専攻している。言語学が副専攻であろうか。対象言語は主にトルコ語である。日本語を含めた他の言語も扱ってはいるが、最も力を入れているのはトルコ語音声学である。

こんな私が、2013年8月28～30日に宮崎県都城市を訪れた。ただの旅行じゃないかと思われるかもしれないが、そうではない。方言調査に行ったのである。なぜ、宮崎県都城市に行ったのか。学術的理由はもちろんある。ただ、それ以外の理由もある。まずは、それ以外の理由を書いてみたい。

さかのぼって2012年2月、私は脳炎で意識を失った。今から思えば期間は短かったものの、言葉を忘れてしまった。うまくしゃべれない。口がうまく動かないのである。文字が書けない。はじめは何を書いてもみみずにならないう。その後、かなを書いてみるが、部分的にひらがな・カタカナを忘れてしまっていた。漢字はほとんど書けない。ノートの使い方が分からない。1行におさまられない。構文が単文のみになる。受身や使役は使えない。留学生の中級ぐらいと評価されたことがあった。

1ヵ月半の寝たきりで、筋肉がかなりなくなった。感情のコントロールができないので、ベッドに拘束される。右半身麻痺のせいで腕をうまく動かせない。1人で部屋から出ることを許可されない。そういうところから、リハビリ生活ははじまった。

意識の混濁がおさまって3月18日ようやく現実世界とつながった。はじめに倒れてから2ヶ月弱のことであった。とにかく、言葉を取り戻さなければならない。どうせ時間があ

るのならと、小学校の算数からやり直した。少しずつ何かものを考えられるようになっていった。

約3ヶ月の入院生活を経て、退院した。新たな病院でリハビリは続くのだが、自宅での生活を始めたのは2012年5月20日のことであった。パソコンはほとんど使えない。能力の問題ではない。1つのメールを打つのに時間がかかるし、それをやることで脳が苦しくなるからだ。高橋名人は「ゲームは1日1時間」と言っていたが、当時は1日1時間のパソコンは無理な状況だった。2,3人のメールを返すのが限界だった。キーボードを打つより、ものを読むのがつらかったからだ。

2012年6月、日本言語学会に行こうと決める。学会に行ってみたくなった。ダメなら即帰るという条件で、同伴者と共に東京外国語大学に行ってみた。まだ、千鳥足状態であり、今の5,6割程度しか話せない状況であった。いろいろな人と会った。驚いていた。そりゃそうだろう。こないだ倒れた人間がここにいるとは、普通は予測できない。でも、あっと驚くタメゴローとは言われなかった。

いろんな人と話したのは刺激になった。脳に負荷はかかるが、ゆっくりなら大丈夫。そんな中、梶さんと会う。言語学会の会長である。倒れたところに言語学会の開催を頼まれていた。私が病気だし、しばらく回復できないだろうから無理だと断った。開催に関しては後日談があるのだが、今ここに書くのはやめておく。あとは、「ゆっくり休めるんなら、あっちこっち温泉に行ってきたら」と言われた。学会の前に鬼怒川温泉に行ったのだが、そうかもっと温泉に行けばいいのかとはっと気づく。

休みの間に結構温泉に行った。療養はもちろんなんだが、外に出る、歩くというのが重要であった。そして、日常生活から離れることも重要であった。飯を作らなくていいし、洗濯をしなくていい。これは楽である。帰ったらしなければならぬのだが。現地ではひと時の間のんびり風呂に入って、近隣を散策してればいい。脳を休めるためには必要なことであった。

脳を休めると同時に、リハビリでは脳を働かせなければならなかった。後遺症として今も残っているのは脳の持久力である。長時間ものを読んだり書いたりすることができない。話すのはいづれ慣れてきたが、聞くのは疲れる。まともな話および話し方をしてくれればそれほど疲れないが、この世界はえてしてそうでない人がうようよしている。まあ、疲れる。

あっちこっちに出かけて、改めて思う。生きているうちに行けるところに行っておこうと思ひ始める。ただ、そのためには体力を取り戻さなければならない。退院後もリハビリに通いながら、リハビリ先で今後のことを考えジムに行くために何をすればいいか相談する。そして、ジム通いを始める。マッコになるためではない。運動がどのように脳に負荷がかかるかを確認しながら、少しずつ体力を取り戻すために。

バランスはだいぶ取れるようになってきたが、疲れると酔ってもないのに千鳥足になる。だから、ランニングマシンの類は乗れない。自転車も乗れない。危ないからである。電車は大丈夫である。途中で降りられるというのは重要である。調子が悪くなってもパニックになっても、途中でどうにかなる。だから、飛行機には乗れない。気圧の変化やゆれに対して身体が対応できないからである。まして、途中で降りられないし。

さて、冒頭で私はトルコ語について研究をしていると書いた。トルコ語については、アクセント論を主に扱っている。トルコ語のアクセントは、高さアクセントである。そして語声調言語でもある。基本的にアクセントの下がり目がある語が例外アクセントとなり、下がり目がなく最終音節が高くなる語声調に従い、語末の音節が高くなるのが、トルコ語のアクセントの特徴である。

語声調とは、何音節の単語であっても任意の型の音調がかぶさることである。語の最終音節が高くなる語声調方言が、日本語では都城方言である。この事実はもう何年も前から知っていた。都城出身の学生何人かには簡単な調査を行ったことがある。しかし、現地にはこれまで一度も行っていない。忙しすぎたというのが大きな原因であった。

ある意味、脳炎がきっかけになったのかもしれない。少しずつ体力を取り戻してきた結果、2013年の夏に南九州を訪れることになり、ゴールを宮崎県都城市とした。東京 - 岡山 - 熊本 - 鹿児島 - 宮崎 - 福岡 - 広島 - 東京というコースを全て電車で移動した。飛行機使えば楽なのに。まあ、疲れた。まともな話し方でない話を聞くのとは違う意味で。なにとはともあれ、人生初の南九州に行くことができた。

熊本、鹿児島にも訪れた理由は、観光のためではない。史跡めぐりもしたので、観光の要素はゼロではないが、一番知りたかったのは藩の境界であった。これは方言境界に関わってくる。こういったものは現地に行って史跡や資料を見た方が早い。現地の図書館には、現地ならではの資料がある。熊本から見た鹿児島、鹿児島から見た熊本。西郷隆盛は敵か味方か。なるほど、視点が変わると位置づけが違う。鹿児島から見た宮崎。宮崎から見た鹿児島。島津邸は薩摩だけでなく都城にもある。なるほど、宮崎北部と都城は明らかに区別できそう。これらをふまえた上で、薩摩と都城の地理と方言の連続性はなんとなく確認することができた。

都城市立図書館に行く。『都城さつま方言辞典』をみつける。さすが地元。はしがきに書いてあったのを引用する。

[1] はしがき

都城方言は、いわゆる鹿児島方言（旧薩摩藩内の方言）の一種である。しかし、それとは都城方言の語彙が二、三割は異なり、そして同じ語彙でもアクセントやイントネーションが大いに異なっており、都城方言は変化に乏しい平板型な話し方をする。

[802] アクセント

先に述べたように、都城方言の八、九割は鹿児島方言と全く同一であるが、アクセントやイントネーションが全く同一ではない。即ち、鹿児島方言は抑揚の変化に富んでいるが、都城方言は極めて平板に話され、一様に語尾が高いのを特徴とする。

鹿児島方言との連続性を裏付けるコメント。でも、アクセントやイントネーションが異なると言っている¹ので、そういう点では別の方言であることを示唆している。ようやく、ここまで来た。あとは実感すれば。

そして、都城で方言調査。今回は自然傍受法がメイン。とにかく現地の生活言語、日常会話を自身の耳で聞いてみたかった。前置きが長々となってしまったが、そんなこんなで都城で方言調査を行い、調査資料をまとめながら考えたことをここで示そうかと思って、キーボードをたたきはじめた。以下、記述資料をもとに思いついたことを書いていく。

2. 都城方言のアクセント

2.1. チキン南蛮

鹿児島である人に次は宮崎だと告げたら、「じゃあ、チキン南蛮食べてくださいよ」と言われた。私はチキン南蛮というものがよく分かっていなかった。食べてことはあるのかもしれないが、自覚も記憶もない。だったら、地元で食えば印象に残るだろうと思った。

ただ、都城に着いた時には、かなりの体力を費やしていた。次の日に図書館や史跡に出かける予定だから、初日は出かけずホテルで食事をとることにした。晩にやってるレストランに入って席に座ろうとする。そこで聞こえてきたのが、「生ビール」であった。それも頭高で。ここは尾高の方言地域やないんか。さっき、フロントで受付をしていた人々は尾高やったぞ。ただただそう思った。

まあ、地元の子やないんかしらんなと思いつつ、席に座る。そして「チキン南蛮セット」を頼む。店員が確認する。「チキン南蛮」と。頭高かつ最終音節の「バン」が高い。なんだこれは。そして「チキン南蛮セット」。やはり頭高かつ最終音節の「ト」が高い。そして、別のテーブルに運んでいる店員が、「チキン南蛮セットのお客様ー」。頭高で「チ」が高く、「セットの」の「ノ」が高い。そして、「お客様ー」の「マー」が高い。

これは最終音節が高くなる語声調であり、アクセントの下がり目もあるなと思い始める。アクセントの下がり目がなく最終音節が高くなるのが都城方言の基本的な音調である。これ

¹ 単純に私のつぼにはまったあとがきも引用しておく。

[1003] あとがき

表記法について、特にアクセントやイントネーションに注意を払い、苦勞を重ねたが、植字工が北九州人で都城方言に全然習わないので誤植が多いうえに、私の新しい知見によって追加、訂正した語彙もあったりして、出版は予定より一年以上も伸びてしまった。

恨みつらみが……

は経験的にもそう感じた。しかし、例外なしの1型ではないことに気づく。そのきっかけが「チキン南蛮」であった。

「チキンナンバン」では、最終音節の「バン」が高い。この方言の音声学的な簡易記述では、音節に音調を付与するのがいいのではと考える。今便宜的にアクセントの下がり目を「1」で表示すると、「チキン南蛮」関連の語は以下のように音調を示す²ことができる。

チ1キンナンバン	HLLH
チ1キンナンバンセット	HLLLLH
チ1キンナンバンセットノ	HLLLLLH

レストランにいるといろいろなメニューを確認のため店員が声に出して言う。「チキン南蛮」については、複数の女性店員がこのように言っていたので、おそらくそうなのだろう。また、他のメニューで類似した型の語彙も聞き取れた。

ト1リノモモヤキ	HLLLLLH
ダ1リアノセットノ	HLLLLLH

なお、「～の」については、基本的にはその直後に区切りがあると思われる。

クガツノ コ1ーハンニ	LLLH FLH
ハチガツノ	LLLLH
オススメノ	LLLLH
カイジルノ ヨーイオ	LLLH LLH
ダリアノセットノ オキャクサマー	HLLLLLH LLLLLH

これは記憶だけでは追いつかんと思って、店員さんに「すみません、おねえちゃんボールペン貸して」と。聞き取りながら、書き取りながら。落ち着いて飯も食えない。食ったけど。チキン南蛮は美味しかった。

2.2. 貝汁です

2 日目は図書館と史跡めぐりをした。図書館で調べ物をしている中、受付での館員と客のひそひそ声でのやり取りが聞こえてくる。移動はタクシーなので、運転手との会話、あるいは流れているラジオで方言を聞く。さすがに、少しはメモしてみたが、図書館で聞き取ろうとすると、いつまでたっても読めないし、タクシーで書き取ろうとすると、会話が進まないし、支払いができないし。ラジオは不意打ちなので、すぐにメモを取るの難しい。それで

² 高低には HL を、重音節 (CVN, CVR, CVQ, CVJ) 内でアクセントの下がり目がある場合は F を、文末 (句末) 上昇調については R を付与した。

も、いくらかは書き取れ、少しは耳慣れてきたので、初期調査としてはこれでいいかと思ひ始める。

さて、夜。今日は出かけてみよう。都城出身の卒業生に、どこへ行けばいいか聞いてみる。ご丁寧にお父さんに聞いてくれたみたいで、何軒かメールで送られてきた。そのうちの1軒に行ってみた。昨日は肉だったので、今日はうまい魚をと。店の名前は書かないでおこう。タイアップ記事ではないので。

いやー、刺身がうまかった。舌鼓を打ちながら食っていた。カウンターで1人なんで、いろんなお客さんの会話や板前さんの調理場の会話が聞こえてくる。職業病が出始める。というか、この日も店でメモするつもりだったので、メモ帳とボールペンを持っていった。昨日得た教訓である。

他のお客さんが貝汁を頼んでいた。私も飲みたくなって、貝汁を頼んだ。同じタイミングでついでに作る方が面倒じゃないだろうと。「カイジルノ ヨーイオ LLLH LLH」と板場に声がかかる。しばらくして、貝汁ができあがった。板前 A さんが店員に渡す際に「カイジルデス LLH LH」と言っていた。そして、その店員はお客さんに「カイジルデス LLLLH」と言って差し出した。

気になってはいたのだが、「です」は直前で区切る場合と区切らない場合があるようだ。語あるいは文節を基本としてと聞いていたが、付属語で独立した単位をなす語があるんだと。さらに、区切られた「です」には下がり目の有無のゆれがみられる。これはない方が主流だと推測しているが、あくまで推測である。

ハッピーク ナナジューエン デスネ	LLH LLLH LLH
ゴジュー イチネン デスカネ	LH LLH LLLH
ミツカラナ1イモンデスカラ	LLLLFLLLLH
タカハシ デスケレド	LLLH LLLLH

サンマイ デ1スカネ	LH HLLH
オダシシテ ヨカッタ デ1スカ	LLLLH LLH HLR

ついでながら、「ます」にも下がり目の有無のゆれがある。これは直前で区切る例はないので、区切るか区切らないかは問わない。

ゴアンナイシマスネ	LLLLLLH
メモ オモチシマショーカ	LH LLLLLLH
オ1サゲ イタシマスカ	HLL LLLLLR
チケットオ オワタシシマスノデ	LLLH LLLLLLLLH
オサゲシマス	LLLLLH
ヤスマサセテ モラエマス	LLLLLH LLLLH

カリラレマ1スカ

LLLLHLL

私の貝汁は目の前の板前さんが直接渡してくれた。さあ、どちらの「貝汁です」だろう。二者択一なんで、丁半博打みたいなものである。しかし、貝汁は予測を裏切ってやってきた。

カイ ジル デス

LH LH LH

「なんで、貝汁の「カイ」と「ジル」の間で切んねん。ジルは連濁してるし、普通区切るか？」と思いながらも、見事なまでに語声調となっている彼のことを間違いなくネイティブであると思わざるを得なかった。

2.3. お疲れ様でーす

図書館やレストランで気づいたのだが、割と方言音調でしゃべっているのに、以下のようなことばを発する時は、共通語のアクセントであった。

これお願いしまーす。

お待ちください。

お疲れさまでーす。

失礼します。

失礼いたします。

ありがとうございました。

飲食店系の(少なくとも私には能天気には聞こえない)文末長音化、平板化については、また別稿で改めて書きたい。それよりも、以下のような会話を都城方言でさっきまで発話していた人たちが、定型文になると突然共通語にスイッチされる³のは、驚き桃の木山椒の木である。スイッチガールの西内まりやよりギャップがある。

ゴアンナイシマスネ

LLLLLLH

オサゲシマス

LLLLLH

オダシシテ

LLLLH

オモチシマショーカ

LLLLLLH

チケットオ オワタシシマスノデ

LLH LLLLLLLLH

³ 他に「スープでございます」「コーラでございます」を女性店員が共通語で発していた。スープやコーラの頭高は「チキン」や「トリノ」のように高低変化は大きくなく、共通語の音調変化の範囲に聞こえた。別の店で、「ソーダと」が「ソーダト LLH」で聞こえたので、このあたりは個人差があると考えられる。

「失礼します」が共通語で、「チキン南蛮セットをお持ちしました」は都城方言というのは、ギャップを感じるだろう。ただ、こちらは全国から来るであろうお客さんにひとまず共通語で声をかけておいて、あとは自身にとってなじんだ方言で話すというのなら、接客として分らないわけではなく、好意的に捉えられるだろう。一方で、「おさげします」を都城方言で言って、その後に「お疲れ様でーす」と共通語であがっていったらどうなんだろう。かわいいと思うか思わないかはあなた次第である。

2.4. みつかりました

今回の小調査ではわずかな例であるが、同一語幹で下がり目の有無にゆれがある語がみつかりました…… もとい、みつかった。

ミ1ツカリマシタ	HLLLLLL
ミツカラナ1イモンデスカラ	LLLLFLLLLL
オ1サゲ イタシマスカ	HLL LLLLLH
オサゲシマス	LLLLLH
ナ1マビール	HLLL
ナマオ	LLH

なお、「生ビール」が頭高になるのはレストランでも1人だけだった。そして、「生ビール」は最終音節が高くなる語声調には従っていない。でも、「チキン南蛮」は複数の人数で頭高だった。こういった音声情報は、やはり生で聞いてみないと分からないものである。

2.5. 寝る子は育つ

語声調は、語や文節に対してかぶさる音調と言われているが、時にそれより大きな句単位にかぶさることがある。語声調がかぶさる範囲を「音韻句」と言ってしまうのは、便宜的にはいいんだろうが、私には今ひとつ理解できていない。こういうときは脳を休めて、少し成長してから考えればいいんだろう。なるほど「寝る子は育つ」とはよく言ったものだ。

さて、何の話をしていたか忘れてしまったが、都城の夜の店での会話で、「寝る子は育つ」が出てきた。

ネルコワ ソダツッテ ユーシネ	LLLH LLLH LLH
-----------------	---------------

「寝る子は」は、学校文法での文節には該当しない。でも、このまとまりに対して、語声調がかぶさったのだから、これが一まとまりなんだろう。似たような例に以下のようなものがあった。

ドーリョーニ キニイラレルカ キニイラレナイカ LLH LLLLLLH LLLLLLH

「気に入られる」「気に入られない」という慣用句がひとまとまりに扱われている。理屈はよく分からんけど、これらが一まとまりになるのは、日本語母語話者の直感としてはすっきりする。よく分からない時は、ゆっくり脳を休めればいいんだろう……。てんどんだからやめておく。

おまけというか、ついでというか。副詞の後ろで区切るか区切らないかも場合によるようだ。多くの例は得られなかったが、次に行く機会があればこのあたりはもう少し聞き取っておくことにする。

ショーショー オマチクダサイ LH LLLLLH

ケータイニ ゼンブツケレバ イーノニ LLH LLLLLLH LLH

2.6. ひとつどうぞ

「どうぞ」の音調。これは LH であった。「こんにちは」は LLLH であった。このあたりは都城方言らしい音声だった。気になったのは「はい」の音調。F か H は聞いたが、R は聞かなかった。「はい」の音声は共通語でも多様だ。結構、大変な調査になるかもしれない。分かった？ はい。

ひとつどうぞとは言われなかったのが、一つも取り上げたかったので、ちょっと強引に。「～つ」の数え方は1つと3つの2例があった。ややこしい数字の並びではあるが、今は気にしない。数字単独は最終音節が高くなる語声調にしていた。「円」「枚」「年」についた場合も最終音節が高くなる。

ハッピーク ナナジューエン デスネ LLH LLLH LLH

イチマイ ジューエン LLH LH

サンマイ デ1スカネ LH LLLH

ゴジュー イチネン デスカネ LH LLH LLLH

「～つ」の数え方は2例しかなかったが、以下のような音調だった。

ヒトツ LLH ミ1ツツ FL

「～つ」での数え方で下がり目がある例が他にあるのか、今度行ったら調べておこう。飲食店だけやとよっぽどの団体客に出会わないとダメなんで。いっぱいおると、やかましいからもっとダメなんだが。

3. トルコ語もついでに考えた

トルコ語の研究をしているから都城方言の調査に行った。そして都城で調査して考えた。だから、トルコ語はついでというわけではないんだが、トルコ語のアクセントについては論文で書いているので、ここでは簡単に触れておく。

チキン南蛮をはじめて聞いた時に、ピンときた。これは語声調とアクセントが併用されているんだと。トルコ語も都城方言も語末音節が高くなる。何音節の語であっても、語末音節が高くなる語声調が適用される。ただ、トルコ語は約 10%程度の例外パターンがある。語声調以外の要素が加わるパターンである。その際に加わるのがアクセントの下がり目である。

簡単に説明してみる。Türkiye なら Tür.ki.ye で LLH という語声調のみの基本パターンになる。「～で」という位置格接辞をつけたら、Tür.ki.ye.de で LLLH となる。語末音節が高くなるというのはこういうことである。では、Ankara や İstanbul だとどうなるか。Ankara は An.ka.ra で HLL、İstanbul は İs.tan.bul で LHL となる。この場合、An と ka の音節境界、tan と bul の音節境界にアクセントの下がり目がマーキングされていると解釈する。そして、これらに位置格接辞をつけると An.ka.ra.da で HLLL、İs.tan.bu.da で LHLL となる。アクセントの下がり目が語声調より優先されるのである。しかし、それは 100%そうだというわけではなく、An.ka.ra.da が HLLH、İs.tan.bul.da が LHLH になる場合もある。この場合は語声調が活きた形になっている。

チキン南蛮を聞いた時に、頭の中に Ankarada の HLLH が思い浮かんだ。なるほど、似てるな⁴。やっぱり来てよかったと。前日にチキン南蛮を食べたらと言ってくれた鹿児島のあの人に感謝である。これがなければ、都城に行っても、ああ語尾上がりやなあで終わってたかもしれない。さすがにそれはないか。

今回得たのは第 1 音節の後に下がり目のマークがあるアクセント型のデータであった。それに注目して聞いていたからかもしれない。きっと他の型もあるんだろう。今回の都城探訪では、効率は悪かったかもしれない。でも、よく分からないうちに調査票を用いた読み上げ録音したデータを解析するというより、久しぶりにこういった泥臭い調査をしてみたかった。街中での会話、自然談話から耳を慣れさせたので、音が身体になじんできた気がする。ただ、飯を食いながら、メモを取る作業は次回はやめよう。落ち着いてものが食べないのは、脳に優しくないんで。完治が遠くなってしまう。赤名リカの気持ちが少しだけ分かる。

またいつか都城を訪れることになるだろう。長時間飛行機に乗れなくなってしまった以上、電車で行けるところには行っておきたい。私は次の駅で何かに出会う。その時に続きの話を書ける時が来るだろう。

ようやくキーボードから指を離すことができるようだ。

⁴ ただし、これは音声学的に抽象化した音調の問題で、音声学的に類似しているかまでは言いきれない。特に、1音節から2音節目の下降が両言語で違っているような気がする。このあたりはいずれ音響音声学的に明らかにしたい。

謝辞

* タイトルの元ネタは高橋由佳利氏の『トルコで私も考えた』（集英社、1992-）であり、さらにこれは椎名誠氏の『インドでわしも考えた』（小学館、1984）のインスパイアである。そして、その前に堀田善衛氏の『インドで考えたこと』（岩波新書、1957）がある。

本稿は科学研究費助成事業、学術研究助成基金助成金基盤研究 C(課題番号 23520472)「トルコ諸語におけるプロソディー分析」(平成 23-25 年度、研究代表者：福盛貴弘)による研究成果である。都城探訪は、トルコ語と都城方言の音調の類似点や相違点を探るための予備調査として行われた。

また、本稿について有益なコメントをいただいた覆面査読者にお礼申し上げる。エッセイを査読するというのもおかしな話ではあるが、ところどころネタをはさみながらの学術エッセイを読んでもらったことに感謝する。

参考文献

福盛貴弘 (2010) 「トルコ語のアクセントについて」『言語研究』137: 41-63.

福盛貴弘 (2013-) 「福盛貴弘の脳炎日記」<http://ameblo.jp/fukumori-takahiro/>

早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』大修館書店

瀬戸山計佐儀 編著 (1992) 『都城さつま方言辞典』三州文化社

執筆者紹介

氏名： 福盛貴弘

所属： 大東文化大学外国語学部

Email： ICG01649@nifty.com